

「行人」の構造

—二つの時間—

榎 林 滉 二

序

一般に、夏目漱石の「行人」(大元・12〜2・11)は、妻直との関係を切っ掛けとして人間全般に対する不信に悩む長野一郎と、二人の間にたつて迷う一郎の弟二郎の物語として語られ、その主人公も知識人の苦悩の物語として多く一郎に擬せられてきた。対して、橋本佳氏(注1)に始まり、それを敷衍して、二郎とお直の愛の存在を重視した二郎中心説が伊豆利彦氏(注2)によって示され、「行人」の読みは様々に揺れた。本報告は後者の考えに沿い、少考を加えたものである。

一、「行人」の時間

周知のように、「行人」は、友人三沢と関西旅行を計画

しながら、三沢の病ではたせなかった「友達」(一〜三三)、母、兄夫婦と紀州和歌の浦に旅し、兄から嫂の「節操」を試してくれと頼まれる「兄」(一〜四四)、兄との争いから家を出て下宿した二郎だが、兄の神経症を心配する「帰つてから」(二〜三八)、兄の友人Hに兄との旅を依頼、夏、Hは兄と旅し、旅先から兄一郎の孤独と不安の状を伝えてくる「塵勞」(二〜五二)の四章からなる。一章における、家の手伝いをしているお貞さんの結婚話の大阪伝達、第二章の兄一郎の依頼、三章での三沢と妹お重との結婚話の取り継ぎ、そして第四章のHさんへの依頼、いずれも二郎は事の仲立ちを頼まれているので、二郎使者説が生じていることもまた多く知られているところである。

ところが、こういう展開の中、これもすでに多くの指摘(注3)のあることだが、ここにもう一つの時間が配置されている。すなわち、この物語は、終始、二郎の手記の形で繰り広げられているのだが、それを書いている二郎の「今」現

在の時間の存在である。ここより、もう一つの物語が暗示される。少し追うなら、それらは、「兄」の章四回、「帰つてから」七回、「塵勞」一回、次のように出てくる。

「兄」の章の三つは、いずれも、和歌の浦で嫂と過した一夜の報告を求める兄の態度に対する二郎内部の内省の形であらわれる。

「自分は此時の自分の心理状態を解剖して、今から顧みると、兄に調戯からふといふ程でもないが、多少彼を焦らす気味でゐたのは慥である。と自白せざるを得ない。尤も自分が何故それ程兄に対して大胆になり得たかは、我ながら解らない。恐らく嫂の態度が知らぬ間に自分に乗り移つてゐたものだらう。自分は今になつて、取り返す事も償ふ事も出来ない此態度を深く懺悔したいと思ふ。」（「兄」四二、傍線筆者、以下同。）

「兄は其後一口も聞きもせず、又答へもしなかつた。二人斯うして黙つてゐる間が、自分には非常な苦痛であつた。今考へると兄には、猶更の苦痛であつたに違ない。」（「兄」四二）

「自分から斯ういふと兄を輕蔑するやうで甚だ濟まないが、彼の表情の何処かには、といふよりも、彼の態度の何処かには、少し大人気を欠いた稚氣さへ現はれてゐた。今の自分は此純粹な一本調子に対して、相應の尊敬を払ふ見地を具へてゐる積である。けれども人格の出来てゐなかつ

た當時の自分には、たゞ向の隙を見て事をするのが賢いのだといふ利害の念が、斯んな問題に迄付け纏はつてゐた。」（「兄」四三）

「取り返す事も償ふ事も出来ない」といった言葉、「人格の出来てゐなかつた當時の自分」等の各文脈には、いずれも、何らかの時間の経過と二郎に大きな変化があつたことが思わせられる。

「帰つてから」の七つは次のようである。これらは大略、三つに分かれる。一つは和歌の浦から帰る途中での、兄と嫂についての思いからくる時間の経過である。

「自分は其時迄嫂に何うして兄の機嫌を直したかを聞いて見なかつた。其後もついぞ聞く機会を有たなかつた。けれども斯ういふ靈妙な手腕を有つてゐる彼女であればこそ、あの兄に対して始終あゝ高を括つてゐられるのだと思つた。」（「帰つてから」一）

「自分は自分の寢台の上で、半は想像の如く半は夢の如くに此青大将と嫂とを連想して已なかつた。自分は此詩に似たやうな眠が、駅夫の呼ぶ名古屋々々と云声で、急に破られたのを今でも記憶してゐる。」（「帰つてから」一）

「母は自分が自分の寢台に上つてから、亦何も云はなくなつた。たゞ兄丈は始めから仕舞迄一言も物を云はなかつた。彼は聖者の如く只すやくと眠つてゐた。此眠方が自分には今でも不審の一つになつてゐる。」（「帰つてから」二）

前の二例は「嫂」の不思議な性格について、後の一例は兄の奇妙な行為についての思い出を記す。これら嫂の手腕や「青大将」の連想、そして兄の眠の意味などは何らかの伏線の意があったように思われる。しかし作品「行人」の中では、結局、どのようにも解き明かされなかった。

第二は妹お重とのかかわりの話である。

「其中で彼女の最も得意とする主題は、何でも蚊でも自分と嫂とを結び付けて当て擦るといふ悪い意地であった。自分は夫が何より厭であった。(中略)自分は今でも雨に叩かれたやうなお重の仏頂面を覚えてゐる。お重は又石鹼シヤボを溶いた金盥の中に顔を突込んだとしか思はれない自分の異なる顔を、何うしても忘れ得ないさうである。」(「帰つてから」九)

「父は此二人と謠の方の仲善なかよしと見えて、彼等が来る度に謠をうたつて楽しんだ。お重は父の命令で、少しの間鼓の稽古をした覚えがあるので、さう云ふ時には能く客の前へ呼び出されて鼓を打った。自分は其高慢ちきな顔をまだ忘れずにゐる。」(「帰つてから」一一)

前者は、お貞さんの婚約者についてお重と口論した時、後者は父の謠友達接待に出た時のお重の姿の思い出であるが、これらも何らかの形で後の物語にかかわってゆく気配があった。が、しかし、結局、そのまま置かれる。(注4)お重の「仏頂面」をなぜ忘れえないか、お重の「高慢ちきな

顔」が、あとのどこに関係したか、するのか不明である。

そして三つめは、兄とのかかわりのものである。

「其折自分は何を話してゐたか今慥に覚えてゐない。何でも兄から玉突の歴史を聞いた上、ルイ十四世頃の銅版の玉突台をわざ／＼見せられた様な気がする。」(「帰つてから」二一)

「彼女は眼を俯せて、自分の傍を擦り抜けた。其時自分は彼女の臉に涙の宿つた痕迹を慥かに認めたやうな気がした。けれども書齋に入つた彼女が兄と差向ひで何んな談話をしたか、それは未だに知る事を得ない。自分丈ではない、其委細を知つてゐるものは、彼等二人より以外に、恐らく天下に一人もあるまいと思ふ。」(「帰つてから」三四)

とくに後者は、嫁入り前のお貞さんに兄が何か話したことについてである。ここでも、「恐らく天下に一人もあるまい」といつた、大袈裟な設定に呼応するものはそのあと(注5)にない。

最後に、「塵勞」における「今」は、二郎の下宿を訪れた嫂に対する思いの形で現われる。「自白」という奇妙なことばがここに使われている。

「自分は少時嫂と応対してゐた。けれども今自白すると腹の中は話の調子で示される程穏やかなものでは決してなかつた。自分は嫂が此下宿へ訪ねて来ようとは其時迄決して予期してゐなかつたのである。」(「塵勞」四)

加えて、「今」ということばはないが、この「塵勞」には、次のような奇妙な伏線もある。Hさんの手紙の一節である。

「私は強ひて兄さんから偽の内容を聞かうともしませんでした。従つて兄さんの家庭には何んな面倒な事情が纏れ合つてゐるか、私には頓と解りません。(中略)たゞ御参考迄に一言注意して置きますが、兄さんは其時御両親や奥さんに就いて、抽象的ながら云々されたに拘はらず、貴方に関しては、二郎といふ名前さへ口にされませんでした。それからお重さんとかいふ妹さんの事に就ても何にも云はれませんでした。」(「塵勞」三七)

「貴方方も兄さんから暖かな光を望む前に、まづ兄さんの頭を取り巻いてゐる雲を散らして上げたら可いでせう。もし夫が散らせないなら、家族のあなた方には悲しい事が出来るかも知れません。兄さん自身にとつても悲しい結果になるでせう。」(「塵勞」五二)

なぜ、二郎、お重を語らないのか、二郎はともかくお重のことを問題にするのか、そして、「悲しい事」、「悲しい結果」とは何か、

以上、こうした「今」の時間の存在とそこでの回想内意からは、しかし、後に起つた何らかの事件の存在とそこまでの時間の経過が感じられる。それら多くは解釈しがたいものを持ち、それらの解明によっては、かなり重要な地点

に達するところがあるようである。そして、そのことは、この作品が二郎の告白手記の形で書かれているが、しかし実は、二郎がいつ、何の目的でこれを書いたのか、書いてゐるのかということが明記されていないこともかかわる。ただ、右の「今」の時間からでも、幾つかのことが浮かび上ってくる。おそらく、兄は死んでゐるのではないかということ、二郎や妹お重とのことから長野一家に何かが起つてゐるであろうということ、それらに何らかの形で嫂がかかわつてゐるであろうということなどである。前掲、伊豆氏は、兄一郎の狂気、そして、「永遠の恋人——そのためにはお直は死ななければならぬ。乱暴な推測を述べれば、そこにこの作品の予告された悲劇があつた。すなわちお直は狂気の一郎によつて殺され、一郎もまた自殺する……。もちろんそのような推測は無意味であるといわれよう。しかしそれは決してあり得ない結末ではない。『塵勞』ではお直をうちたたく一郎が登場してゐるのである。」とまで想像される。^(注6)

二、「行人」と「こゝろ」

そして、「行人」におけるこれらの時間の存在からすぐに思い起こされるのは、次作「こゝろ」(大3・4・8)における、同質の時間設定である。「こゝろ」も同じく

「今」の時間が設定されていることはよく知られている。そして、これまた周知のように、「こころ」は、「先生と私」(一〜三六)、「両親と私」(一〜一八)、「先生と遺書」(一〜五六)の三部より成り、二郎中心物語から一郎の苦悩へ中心が移ったかにみえる「行人」と同じく、語り手の「私」中心に展開していた物語が最後「先生と遺書」によってその中心が奪われ、先生の苦悩告白の物語となる。「こころ」は多く、この先生の遺書で読まれた。しかし、ここにも「今」の時間があつた。それらは、次のように出てくる。

まず、つぎの二つは、「私」と「先生」との出会いの頃のものである。「それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌つてゐたのではなかつたのである。」(「先生と私」四)、と言ひ、「私は不思議に思つた。然し私は先生を研究する気で其宅へ出入りをするのではなかつた。私はたゞ其儘にして打過ぎた。今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ」(「先生と私」七)と記す。先生の死は早くから予告されている。

ついでには、「奥さん」とかかわるもので、次の二つがある。「奥さんとも大分懇意になつた後であつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向ひで色々の話を

した。然しそれは特色のない唯の談話だから、今では丸で忘れて仕舞つた。そのうちでたつた一つ私の耳に留まつたものがある。」(「先生と私」一一)と語り、「もしそれが詐りでなかつたならば、(実際それは詐りとは思へなかつたが)、今迄の奥さんの訴へは、感傷を玩ぶためにとくに私を相手に拵えた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかつた。尤も其時の私には奥さんをそれ程批評的に見る気は起らなかつた。私は奥さんの態度の急に輝いて来たのを見て、寧ろ安心した。」(「先生と私」二〇)と記す。奇妙なのは、先生が帰宅した時の奥さんの急激な変化に対する私の思いである後者の中に、何らかの奥さんに対する反感が含まれることばがあることである。「其時の私」は批判的に見なかつたとある、すると今はどうだというのであろうか。ここで奇妙な前提を思い起こす。すでに早く、先生と「恋」について話しあつた時、恋は「罪悪」と言ひ、なぜと聞く私に、「なぜだかいまにわかります。いまにじやない、もうわかつてゐるはずです。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いてゐるじやありませんか。」(「先生と私」一三)と答えたやりとりがあつたことである。すぐに先生は「恋に上る階段」の順序としてまず「同性の私の所」へ動いたのだと言ひ換えはするが、いかにも奇妙な伏線である。

そして、先生との交渉を続ける中、「私は先生が私のう

ちの財産を聞いたり、私の父の病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮かんだ儘を其通り口にする、普通の談話と思つて聞いてゐた。所が先生の言葉の底には両方を結び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論其処に気が付く筈がなかつた。「先生と私」(二七)という、先生による「私」の家に關した、これも奇妙な予告がある。ここには、のち、父の死にかかわりながら「私」の家庭に何かが起こる予兆が存在する。

最後は、「私は妻を残して行きます。私がるなくなつても妻に衣食住の心配がないのは仕合せです。私は妻に残酷な驚怖を与へる事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬ積です。妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。」(「先生と遺書」五六)と言ひ、「私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です。然し妻だけはたつた一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい。」(「先生と遺書」五六)と記す。先生の遺書、最後のことばであり、願ひである。ここでも、すでに様々に論議がなされてきたが、とくに問題となるのは、なぜ「私」が先生の秘密、先

生が托した願ひを破つて、これらを記しているかという点とである。

その前提となる次のようなやりとりもある。

「『あなたは本当に真面目なんでしょうか』と先生が念を押した。『私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから実はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない。あなたは疑るには余りに單純すぎる様だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。あなたは腹の底から真面目ですか。』

『もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も真面目です』

私の声は顛へた。(「先生と私」三二)

それなのに、なぜ先生の願ひに反してこれを記しているのか。これから、奥さんは死んだという考え、奥さんと「私」との間にかあつたという論、それも奥さんの何かにかゝわる背信、あるいは奥さんとの争いなどがあつたなど論じられる。それに加えて、これまた有名な話であるが、「こゝろ」を単行本にした時の、「当時の予告には数種の短編を合してそれに『心』といふ標題を冠らせる積だと読者に断つたのであるが、其短篇の第一に當る『先生の遺書』を書き込んで行くうちに、予定通り早く片が付かない事を発見したので、とうとうその一篇丈を単行本に纏め

て公けにする方針に模様がへをした。」（『心』自序」大
3・9）ということばである。

もし、この漱石のことばを信ずるなら、始めの構想では、むしろ「私」の様々な心体験が中心であり、その挿話であった「先生の話」が肥大して「先生の遺書」物語になってしまったということである。もしその原構想を重んずるなら、話は、「両親と私」、「兄と私」、「奥さんと私」などといった別の物語が存在したかもしれないのである。「こゝろ」の中の「今」の時間の存在は、それらすべてが、何らかの形で経過し、終っていることを意味する。

このことを「行人」に帰して考えるなら、この二作がいかに同じ形をしていることに驚かされる。その地平で考えるなら、「行人」も、「私」中心に始まる設定から考え、二郎と嫂、あるいは二郎の後半生の物語が中心となり、兄一郎の苦悩は、「こゝろ」の先生のように、一挿話となるべきものであったかもしれない。つまり、二郎は言われてきたような一郎と直との連絡係りではなく、人生の彷徨人としての行人になる。

三、「行人」の意図

二郎がこの文を書く意図についても様々に論じられてきた。その中心となるのは、兄に対する二郎の申し開きの

書、または嫂への書などである。しかし、「こゝろ」から類推すれば、「こゝろ」で先生が死んでいるように、右の時間の関係からおそらく兄一郎は死んでいるので、兄への申し開きの書ではないことは確かである。もし万一、兄が生きているとしたらHさんの書を兄へ知らせることは、兄の猜疑を更に増すだけになる。嫂への書という考えも、嫂はむしろ共犯の側にいるので成立しない。広く読者へ寄すという考えもあるが、それは二郎の地位からしてさして意ある答ではない。

では何のためか、結論から記せば、これは一種の懺悔の書としてのものとも思われる。いわば、一種の鎮魂の書とも言える。荒らぶるままに死んでいった兄に対して、自ら犯しかけた罪、あるいは犯した罪に対する懺悔の意がここに込められているように思われる。二郎は嫂と本当に何もなかったのか、外見上何もない、しかし、二人の間には明らかに何らかの交流があったようである。少し追ってみた。

二人は、「自分は彼等を散歩に連れ出さうと試みた。母は疲れたと云つて応じなかつた。兄は面倒らしかつた。嫂丈には行きたい様子が見えた。」（兄」三）とか、「自分の見た彼女は決して温かい女ではなかつた。けれども相手から熱を与へると、温め得る女であつた。持つて生れた天然の愛嬌のない代りには、此方の手加減で随分愛嬌を搾り出

す事の出来る女であつた。」(「兄」一四)と、互いに思いやりをかわす。そこに何らかの心の交差がある。それは次のように繰り返えされる。

「何処へ」

『中て、御覧なさい』

今の自分は兄のゐる前で嫂から斯う気易く話し掛けられるのが、兄に対して何とも申し訳がないやうであつた。のみならず、兄の眼から見れば、彼女が故意こゝろに自分に丈親しみを表はしてゐるとしか解釈が出来まいと考へて誰にも打ち明けられない苦痛を感じた。」(「兄」二三)

「若輩な自分は嫂の涙を眼の前に見て、何となく可憐に堪へないやうな気がした。外の場合なら彼女の手を取つて共に泣いて遣りたかつた。」(「兄」三二)

「『云はなくつても腑抜よ。能く知つてるわ、自分だつて。けど、是でも時々ひとは他から親切だつて賞められる事もあつてよ。さう馬鹿にしたものでもないわ』

自分は嘗て大きなクツシヨンに蜻蛉せいてんだの草花だのを色々の糸で、嫂に縫ひ付て貰つた御礼に、あなたは親切だと感謝した事があつた。

『あれ、まだ有るでせう綺麗ね』と彼女が云つた。

『えゝ。大事にして持つてゐます』と自分は答えた。」

(「兄」三二)

嫂を「可憐」と思い、彼女のくれた「クツシヨン」を大

切にする二郎と二郎の賞めことばを大切に憶えている嫂、それらは、「三四郎」(明41・9・12)におけるヘリオトロープや、「それから」(明42・6・10)における銀杏返しや百合の花などを思い出させる。いずれも女主人公の側からの親しみのサインであつた。

有名な和歌の浦の一夜も二郎の心一つで、事は變つていたかもしれない。

「居るんですか」

『居るわ貴方。人間ですもの。嘘だと思ふなら此処へ来て手で障つて御覧なさい』

自分は手搜りに搜り寄つて見たい気がした。けれども夫程の度胸がなかつた。其うち彼女の坐つてゐる見当で女帯の擦れる音がした。」(「兄」三五)

「同時に今日嫂と一所に出て、滅多にない斯んな冒険を共にした嬉しさが何処からか湧いて出た。其嬉しさが出た時、自分は風も雨も海嘯つなみも母も兄も悉く忘れた。すると其嬉しさが又俄然として一種の恐ろしさに変化した。恐ろしさと云ふよりも、寧ろ恐ろしさの前触であつた。何処かに潜伏してゐるやうに思はれる不安の徴候であつた。」

(「兄」三七)

「『あなた今夜は昂奮してゐる』と自分は慰撫なだめる如く云つた。

『妾の方は貴方より何の位落ち付いてゐるか知れやしな

い。大抵の男は意気地なしね、いざとなると』と彼女は床の中で答へた。」「兄」三七)

ここには、嫂の告白と決意がある。あとは二郎の心次第であった。「三四郎」における「あなたは余つ程度胸のないう方ですね」という名古屋の女と同じ構図がある。

そして、いつかより深い心の交流が二人の間に生じていることを作品は次のように語る。

「其時兄は常に変らない様子をして、(嫂に評させると常に変わらない様子を装つて、)『二郎一寸話がある。彼方の室へ来て呉れ』と穏かに云つた。自分は大人しく『はい』と答へて立つた。然し何うした機か立つたときに嫂の顔を一寸みた。其時は何の気も付かなかつたが、此平凡な所作が其後自分の胸には絶えず驕慢の発現として響いた。嫂は自分と顔を合せた時、いつもの通り片脛を見せて笑つた。自分と嫂の眼を他から見たら、何処かに得意の光を帯びてゐたのではあるまいか。自分は立ちながら、次の室で浴衣を畳んでゐた母の方を一寸顧て、思はず立竦んだ。母の眼付は先刻からたつた一人でそつと我々を観察してゐたとしか見えなかつた。」「兄」四二)

嫂に対して共犯、母に対して罪人の心の動きである。気味わるい母の猜疑の眼、恐ろしい破局を思わせる構図がある。そして何より、いつ「嫂に評させ」たのだろうか。

和歌山からの帰りの車中、二郎は嫂の幻に苦しめられ

る。「自分は暗い中を走る汽車の響のうちに自分の下にある嫂を何うしても忘れる事が出来なかつた。彼女の事を考へると愉快であつた。同時に不愉快であつた。何だか柔かい青大将に身体を絡まれるやうな心持もした。」「帰つてから」二、「青大将」に絡まれるやうといった実感が生々しい。

ついで、これもよく指摘されるところであるが、更に奇妙な設定がある。二郎は兄より先に嫂を知っていた。母に、「御母さんの前ですが、兄さんと姉さんの間ですね。あれには色々複雑な事情もあり、又僕が固から少し姉さんと知り合つたので、御母さんにも御心配を懸けて済まない様ですけれども、大根をいふとね。兄さんが学問以外の事に時間を費すのが惜いんで、万事人任せにして置いて、何事にも手を出さずに華族然と済ましてゐたのが悪いんですよ。」「帰つてから」二〇)と、次郎は、嫂を弁ずる。これも兄の猜疑を深めることになるのだが、なぜこの作品にそういう設定をしているのかが問題となる。そして、この伏線も、作中では結局、解かれないままに終わる。

家を出る決心をした二郎を嫂は冷たくあしらう。兄に下宿することを告げ、兄の部屋を出る時、「嫂は一面識もない眼下のものに挨拶でもするやうに、一寸頭を下げた自分に黙礼をした。自分が彼女から斯んな冷淡な挨拶を受けたのも亦珍らしい例であつた。」「兄」二八)。二郎はたじろ

ぐ。しかし、この冷たさは二人の交流の粘性を逆に示すものでもある。事はそこで終らない。下宿した二郎のところへ嫂が訪れてくる。嫂はなぜ近頃、家によらないかと問う。二郎は嫂に追窮されるのが堪えがたかった。「他の人はどうあらうとも、嫂丈は此点に於て自分を追窮する勇氣のないものと今迄固く信じてゐたからである。」二郎は、「自分は思ひ切つて『あなたは大胆過ぎる』と云はうかと思つた。けれども疾に相手から小胆と見縊られてゐる自分は遂に卑怯であつた。」(「塵勞」三)と述懐する。だが、これらのやりとりは明らかに心をかかわした二人のような姿がある。「箱火鉢」に向いあつて「手を翳す」二人の姿には一つの恋の姿がある。

「嫂は席に着いた初から寒いといつて、猫背の人のやうに、心持胸から上を前の方に屈めて坐つてゐた。彼女の此姿勢のうちには女らしいといふ以外に何の非難も加へやうがなかつた。けれども其結果として自分は勢ひ後へ反り返る氣味で座を構へなければならなくなつた。それですら自分は彼女の富士額を是程近く且長く見詰めた事はなかつた。自分は彼女の蒼白い頬の色を燄の如く眩しく思つた。」(「塵勞」四)

嫂の帰つた後、二郎は、「其晩は静かな雨が夜通し降つた。枕を叩くやうな雨滴の音の中に、自分は何時迄も嫂の幻影を描いた。濃い眉とそれから濃い眸子、それが眼に浮

ぶと、青白い額や頬は、磁石に吸い付けられる鉄片の速度で、すぐ其周囲に反映した。彼女の幻影は何遍も打ち崩された。」(「塵勞」五)と、嫂の幻を追い続けるのである。以後の日々、二郎は嫂の姿を様々に追う、「一人の嫂が自分には斯う色々に見えた。事務所の机の前、昼餐の卓の上、帰り途の電車の中、下宿の火鉢の周囲、さまざまの所でさまざまに変つて見えた。」(「塵勞」六)、二郎は「他の知らない苦しみ」を苦しむ。暗い日々を送るのである。

これらと全く同質の心の動きが、先行の作品「三四郎」の中にすでにあつた。

「女は顔を背けた。二人共戸口の方へ歩いて来た。戸口を出る拍子に互の肩が触れた。男は急に汽車で乗り合はした女を思ひ出した。美禰子の肉に触れた所が、夢に疼く様な心持がした。『本当に宜いの?』と美禰子が小さい声で聞いた。向から二三人連の観覧者が来る。」(八)

「雨は段々濃くなつた。雫の落ちない場所は僅かしかない。二人は段々一つ所へ塊まつて来た。肩と肩と擦れ合ふ位にして立ち竦んでゐた。雨の中で、美禰子が、『さつきの御金を御遣ひなさい』と云た。

『借りませう。要る丈』と答へた。」(八)

この場合の美禰子は、結局、他の男と結婚するのだが、自己の本意を捨てた悲哀は、後々、美禰子を苛んでいる。その継承が「それから」(明42・6・10)の長井代助と三千

代にみられる愛の形であることは今更述べるまでもないであろう。三千代を取り返そうとした時、代助は「自然の昔」に帰るとして、そこに「幸」^{フリス}を感じている。「行人」でも、「それから」と同じく、二郎も兄より先に嫂を知っていた。そして、兄を裏切つて恋をしたパオロとフランチエスカの話を引きながら、「道徳」よりも「自然」の恋に悲しみを込めつつ賛意を表す二郎の姿がある。だが、二郎の恋は「自然」の意にそうものであろうか。

「三四郎」、「それから」、「門」(明43・3・6)そして「こゝろ」にいたる三角関係論から見たとき、一般に、「行人」は異質の作とみられてきた。しかし、一郎の苦悩を中心に語られてきたからで、もし、視点を二郎におけば、右の愛の形質からも、「行人」から「こゝろ」への道行きは一つの必然となる。あわせて、「門」の安井の苦悩を一郎に擬すことも可能になる。「こゝろ」原構想の先行、「行人」はその早い試みということになる。つまり、二郎と「こゝろ」における「私」との類同の意味でそれは成立する。「こゝろ」において、もし、先生とKとの話が一つの挿話であり、述べてきたように、「両親と私」、「兄と私」、「奥さんと私」などといった物語が繰り広げられていたとしたら、この「行人」においても、Hさんの手紙も一挿話となり、二郎主人公説は動かないことになる。二郎とお直の関係に何らかの展開が意味されていたかもしれないが故

である。^(注7) 逆に考えれば、「行人」が原構想通り語られていたら、「こゝろ」は「先生と遺書」だけに終始していたかもしれないとも言えそうである。「こゝろ」は「行人」の再度の試みであり、そこでもやはり、何かを語り残した、あるいは、語りえなかったのである。事は結局、原構想通りにははこばれなかった。「行人」後半は、Hさんの手紙にかゝわり、一郎中心に展開され、そこで二郎の問題は破棄された。

四、淋しさと不安

兄の不安、Hさんの手紙などから、結局、二つのことが考えられる。一つはやはり二郎は使者、伝え人にすぎないという説、今一つは作品内容の変質論である。後者の意味でもこの作品は多く読まれてきた。これまた周知のように、「行人」は一気に書きあげられたものではない。作品が、大略終りかけたところで、漱石は病を得て休載する。小康を得て書き継がれていったのが、第四章の「塵勞」、Hさんを介して語られる兄一郎の苦悩であった。それは思ったより長びいた。そこで漱石は一郎を襲う不安や焦燥、そして孤独感を徹底して書いた。その時、漱石は二郎より一郎の方へ心が移っていったので、ここに分身の比重移動のようなものがある。

これらから、作品モチーフとして現われてくる二つのことを考えてみたい。一つは、江藤淳が漱石の嫂登世思慕説を早くに提しているが、それらとかゝわる、若き日の何らかのタブーとしての恋愛体験に関するものである。見てきたように、「行人」はこの恋の傍証となるところが多々ある。兄嫁登世を慕いつづけた姿は、二郎とお直の形で現われている。そして、今一つは、のちの「道草」(大4・6・9)で、縷々語られる漱石と妻鏡子との不協和の問題である。それらはまさしく一郎とお直の物語である。そして、その地点で、いわれるように、「行人」前半と後半に大きな「裂け目」、ずれが生じているのである。^(注8)

そのことは作品内部から見ると次のようにも語れる。「行人」前半は嫂お直の淋しきの描出に満ち、後半は兄一郎の不安、焦燥の描出に満ちているということである。これらもよく知られていることだが、文意上、少し追ってみる。お直の淋しさは様々な形で現われ、つねにお直の姿につきそっている。

「嫂は『相変らずですわ』とたゞ一口答へた丈であつた。嫂は夫でも淋しい頬に片脛を寄せて見せた。彼女は淋しい色沢の頬を有つてゐた。それから其真中に淋しい片脛を有つてゐた。」(兄一六)

「『直お前何うするい』」

母が斯う聞いた時、嫂は例の通り淋しい脛を寄せて、

『妾は何うでも構ひません』と答へた。それが大人しいとも取れるし、又聴きやうでは、冷淡とも無愛想とも取れた。(兄一六)

兄にかかわり出てくるこういった「淋しさ」は、世を諦め、あるいは冷罵するような「笑み」として、お直の顔に現われてくる。淋しい笑みは、「自分は恥づかしい心を抑へてわざと斯う云つた。すると嫂は変に淋しい笑ひ方をした。」(兄三一)、「自分は今度は彼女の女に恥ぢて、決して傍に手伝つてゐる嫂の顔を敢て見なかつた。それでも彼女の若くて淋しい唇には冷かな笑の影が、自分の眼を掠めるやうに過ぎた。」(兄四四)と、繰り返えされる。和歌山から帰る車中、帰ってからの日常にも現われる。後半の一郎の寂しさに対して、前半のお直に集中する孤独の姿である。今少し追うなら次のようである。

それらは多く、右例と同じく兄とかかわりつつ、「嫂は何時もの通り淋しい笑ひ方をして、『え、直御後から参ります』と答へた。」(帰ってから)二とか、「嫂は平生の通り淋しい秋草のやうに其処らを動いてゐた。さうして時々片脛を見せて笑つた。」(帰ってから)四と現われる。「淋しい秋草」といつたことばの裏には語り手の心も感じられる。二郎が別居を決意し、別れを告げるときも、他の家族の苦い顔に対して、「嫂丈は淋しいながら笑つて呉れた。『もう御出掛。では御機嫌よう。又ちよくく遊びに

入らつしやい』」「帰つてから」(二九)と云う。そして、不意に二郎の下宿を訪れた時も、お直は同じ笑を持ち込んでゐる。

「彼女はコートの片袖をするくと脱ぎながら『さうお客扱ひにしちや厭よ』と云つた。自分は茶器を洒がせる為に電鈴を押した手を放して、彼女の顔を見た。寒い戸外の空気に冷えた其頬は何時もより蒼白く自分の眸子を射た。不断から淋しい片鱗さへ平生とは違つた意味の淋しさを消える瞬間にちらく動かした。』」「塵勞」(二)

そして、お直の帰つたあと、二郎は、お直の淋しさを自己の淋しさとして感じる。ここにはまさしく明らさまな愛の形がある。これらお直の淋しさはつねに二郎の視点からとらえられているのである。

嫂の淋しさは二郎の心に響く。「夫から三四日の間といふもの自分の頭は絶えず嫂の幽霊に追ひ廻された。事務所の机の前に立つて肝心の函を引く時ですら、自分は此崇を払ひ退ける手段を知らなかつた。或日には始終他人の手を借りて仕事を運んで行く様な歯搔ゆい思ひさへ加はつた。」、その心で生き、「自分は余程前から事務所ではもう快活な男として通用しない様になつてゐた」ことを感じ、その中で彼は、「自己と周囲と全く遮断された人の淋しさを独り感じ」(「塵勞」六)ながら日々を送るのである。淋しさが二郎を包む。嫂の淋しさと同化した二郎の淋しきで

前半部は括くられてゆく。二人の心はそこで何らかの交流をみるのである。

対して、「行人」後半、第四章の「塵勞」は一郎の不安と焦燥に塗りこめられている。一郎のそれらをHさんの手紙は次のように伝えている。

「兄さんの苦しむのは、兄さんが何を何うしても、それが目的にならない許りでなく、方便にもならないと思ふからです。たゞ不安なのです。従つて癡としてゐられないのです。兄さんは落ち付いて寝てゐられないから起きると云ひます。起きると、たゞ起きてゐられないから歩くと云ひます。歩くとたゞ歩いてゐられないから走ると云ひます。既に走け出した以上、何処迄行つても止まれないと云ひます。』」「塵勞」(三一)

まさに一種の焦燥地獄である。寸時の安寧もない。Hさんは、「止まれない許なら好いが刻一刻と速力を増して行かなければならないと云ひます。其極端を想像すると恐ろしいと云ひます。冷汗が出るやうに恐ろしいと云ひます。怖くてく堪らないと云ひます。』」「塵勞」(三一)とも続ける。ただに不安でただに焦り、そしてすべてが怖くなるのである。一郎は次のように自己劇化してゆく。

「人間全体が幾世紀かの後に到着すべき運命を、僕は僕一人で僕一代のうちに経過しなければならぬから恐ろしい。一代のうちなら未だしもだが、十年間でも、一年間で

も、縮めて云へば一ヶ月間乃至一週間でも、依然として同じ運命を経過しなければならぬから恐ろしい。(中略)要するに僕は人間全体の不安を、自分一人に集めて、そのまた不安を、一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを経験してゐる」(「塵勞」三三)

何が不安で、何故そう焦るのか、それらが自分でもはっきりしないから更に不安がつる。はっきり確信のできるものがほしいのである。その果ては、一種の狂気の世界へ入ってゆく。絶対を追い求め、果たせぬうめきである。その狂気は次第に表に出てくる。一郎の異常をHさんは、「二人で其処にある茶屋に休んだ時、兄さんは又足の下に見える森だの谷だのを指して、『あれ等も悉く僕の所有だ』と云ひました。二度迄繰り返された此言葉で、私は始めて不審を起しました。然し其不審は其場ですぐ晴らす訳には行きませんでした。私の質問に対する兄さんの答は、たゞ淋しい笑に過ぎなかつたのです。」(「塵勞」三六)と伝(注)える。それらは、有名な「死ぬか、気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか。僕の前途には此三つのものしかない」ということばに集約されてゆく。「現在の僕は君正気なんだらうかな。もう既に何うかなつてゐるんぢやないかしら。僕は怖くて堪まらない」(「塵勞」三九)とも言う。それは、「門」で追つた安住の地を求める再度の試みでもある。それ故、何も思わぬ人々が羨しい。

お貞さん論議はその実験でもあろう。善人のお貞さん故に、一郎は何かを托そうとした。しかし、「僕はお貞さんが幸福に生れた人だと云つた。けれども僕がお貞さんのために幸福になれるとは云やしない」(「塵勞」五一)とも言う。家族でもないHさんとお貞さんのことを話題にするところに作品モチーフの一つがある。

それらは次第に自己劇化から自己反省、自己断罪へと傾いてゆく。悪いのは他でない、もしかしたら自己かもしれない。かくて、他に問うたと同じように自己を問い直してゆく。「道草」の世界は眼前にある。しかし、やはり要は、自己の「幸福」の問題に帰ってくるのが一郎の世界であつた。

「『何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪よこしまになるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分らない。自分が悪くした妻から、幸福を求めるのは押が強過ぎるぢやないか。幸福は嫁に行つて天真を損はれた女からは要求出来るものぢやないよ』

兄さんはさういふや否や、茶碗を取り上げて、むしろくつて盛の飯を平らげました。」(「塵勞」五二)

妻を悪くした「僕」への反省の深化はまだここにはない。そこを避けたまふ、一郎の諦観は孤寂たる人間存在の根源に連なる。

これらから次のことが推測される。漱石は自らの半生にあった最奥の秘密をここに記そうとした。若き日の禁じられた恋の物語である。二郎お直の物語としてそれは現われ、若き日の自己を二郎に托し、一つの悲しき恋の経緯を記そうとした。だがそれはやはり秘められるべき大なる禁忌であった。そしてその時、無意識のうちに一つの正当化が作品内に配されようとした。すなわち、悪いのは自分ではない、兄の冷たさ、兄の不実が嫂を孤独にした、嫂は終始その淋しさを訴え続けた。自分はそれに同情し、いつか心を接していったのだ。漱石はその経緯を何としても語りたかった、語らねばならないと思ったのである。「行人」執筆の構図はかくてある。

しかし、展開の途中、病を得、病癒えて帰ってきた時、すでに大事は過去の生の告白ではなく、自らの現在の生の淋しさに移っていた。妻との不協和の中で、このまま死ぬのはあまりに惨めではないか。漱石は、「行人」続行にあたり、自らの生の不安、焦燥、淋しさを一気に投入する。「道草」の先行である。ここに二つの時間とそこでの乖離がある。若き日における禁忌の恋の時間と、現在の不安、焦燥の時間である。そこで漱石の分身は二郎から一郎に急激に入れかわる。

結果として、二郎嫂物語はその一番大切な個所を水面下に秘めたまま終わる。不安を語る一郎の側に意が動いたが

故である。しかし、自らの禁忌を語り尽くせなかったとき、実は一種の安堵と一種の無念とが漱石の心中を去来したようにも思われる。意識下の多くは禁忌の発表回避にあったかもしれない、そして、その回避の決心が病を治癒させたのかもしれない。しかし、それでは事は終わらない。漱石は再び幻の恋の告白、懺悔を始める、「こゝろ」の構想はこのようにして成ったと思われる。直接告白でなく、変形せる禁忌開きの物語であった。

だが、すでに見たように、「こゝろ」も構想崩れに終わった。「私」を中心とする物語はここでも熟成せず、中心は先生とKの話に移る。そして、「行人」後半部に出てきた一郎・直の問題、夫婦の地獄の問題は「道草」で追求され直す。そこで漱石は苦しむ健三と同じように苦しむお住を記す、有名な他者の発見である。漱石はここで分身一郎の苦しみを語ろうとし、事実、それなりに語り終えた。しかし、今一つの分身二郎の問題は、結局、直接には生涯語り切れなかった。禁忌はそれだけ強かったのである。これも、漱石の執筆覚悟としてよく引かれることであるが、芸術家を論じて、漱石は、「だから芸術家たるべき資格は、自ら進んで徹底的に己れを表現しやうとする壮快な苦しみに存するので、吐くものを吐き出して仕舞って始めて出来上った作物の善悪で極めるのではないのである。」（「文展と芸術」大元・10・15〜28）とも述べている。しかし、「行人」、

「こゝろ」二つの試みを残したまま、漱石は忽卒と世を去つてゆく。

以上、「行人」における過去と現在、漱石における原罪としての過去と存在としての現在の、各二つの時間について述べた。勿論、意は後者の過去、現在にある。

注(1) 橋本佳「『行人』について」(昭42・7『国語と国文学』)

(2) 伊豆利彦「『行人』論の前提」(昭44・3『日本文学』)。

伊狩章「『行人』の解釈について——夏目漱石の伏線技法——」(昭61・3『新潟大学国文学会誌』)なども。

(3) 須田喜代次「『行人』論(1)——新時代と『長野家』——」(平1・3『大妻国文』)など。

(4) お重と直、二郎と一郎の「性の争ひ」と秋山公男氏は考えられる(『『行人』の主題と構造』(昭55・12『立命館文学』))。

(5) 平岡敏夫氏は「希求的な『家』の幻想」を見出していると論じられる(『『行人』その周辺』昭47・4『国語と国文学』、『漱石序説』(昭51・10 塙書房)所収)。

(6) 前掲注2

(7) 王理恵氏は、Hさんを登場させずにこのまま「塵勞」を書き募っていけば、「二郎と直の決断の行方を書くことになるだろう」とされる(『『行人』論——共振する沈黙への旅立ち——』昭62・3『成城国文学』、『日本文学研究資料新集14 夏目漱石・反転するテキスト』(平2・4

有精堂)所収)。

(8) 前掲注2、小泉浩一郎「相对世界の発見——『行人』を起点として——」(昭53・5『国文学』)など。

(9) 千谷七郎氏は、「せめて自然でも思う存分に楽しみたい」思いと述べられる(『漱石の病跡——病氣と作品から——』昭38・8 勁草書房)。